

てしかが



「おじいちゃん・おばあちゃんとギョツ」

9月13日に行われた和琴小学校児童と屈斜路長寿会の皆さんとの交流会での1コマです。子どもたちが企画したさまざまな遊びを楽しみながら、子どもたちと地域のお年寄りの皆さんがふれあいました。(関連記事18~19ページ)

主な内容

- 弟子屈町表彰式……………②
- 政治はみんなのもの……………④
- 協力隊通信……………⑧
- ワインイベント葡萄色の週末(エピソードウィークエンド)……………⑨
- 森地熱発電所を巡る町民先進地視察……………⑨
- 町税などの納期限/夜間納税窓口開設……………⑩

むかしむか史 (312)

てしかがが歴史写真館¹⁸⁶



湖底で捕獲されたウチダザリガニ
(国立環境研究所提供)

厄介者から見える深い理由

先月「摩周湖最深部でザリガニ捕獲 大型生物は初発見」という見出しの付いた記事が全国紙に掲載されました。学術チームが今年の6月に捕獲カゴを設置して9月上旬に引き揚げたところ、8~10センチの生きたウチダザリガニ3匹が入っていた、ということ伝える内容でした。

標準和名として「ウチダ」と付いているのは、北海道大学の内田亨教授が持っていたザリガニの標本が種の同定(分類上の所属を決定すること)に役立ったことによるのですが、原産地は北米大陸です。もともと国内には生息していなかった生物が、現在は阿寒国立公園の特別保護地区に指定されている摩周湖にいることは、まぎれもない事実です。

昭和初期、食用として、また魚の餌になることが期待され、養殖地として選ばれたことが始まりです。「エゾサシユウオ以外の魚類がほとんど見られない美しい湖だったから」ということが選定理由だったとみられています。試験的飼育が成功すると、本格的に約500匹が輸入され、摩周湖に放たれました。その後、この湖は国立公園となり、戦争という混乱期を経て養殖事業どころではなくなり、いまやウチダザリガニは特定外来生物にされてしまいました。

透明度が高いことで知られる摩周湖は、生物の育成に必要な栄養物質が極端に少ない貧栄養湖としても有名です。それだけに、大型の生物が、しかも環境や生態系が変わるとされる目安の200メートルを超える深さで生きていたということに、大いに驚かされたのです。時代に翻弄(ほんろう)された当事者は、与えられた場所で、したたかに生き抜いてきただけなのですが。

てしかが郷土研究会(斎藤)